



宝塚・やおい、愛の読み替え

東園子著

男性的性愛と異なる世界分析

宝塚に一度だけ行ったことがある。駅を降りると劇場に至るまでの通りに様々な世代の女性たちが溢れ、なんとも嬉しそうな表情を浮かべ語りあっている。なかには親子三代の家族連れの姿もみられた。東京の宝塚劇場の前を通りすぎたときに目にした、雨の中必死になってチケットを求めたたずむ少女たちの姿を思い浮かべ、なにか不思議な感情に襲われた。同じような感情は、昨年のマンガ同人誌の即売会コミティアでも抱いた。コミケとは違い圧倒的に女性比が高く、独特のジェンダー化された空間を作りだしていた。スポーツや居酒屋とは全く違う意味において。

本書は女性たちの心をとらえて離さない宝塚と「やおい」——男性同士の親密性を女性向けに表現するジャンルを、その受容の様式にそくして分析し、「女性同士が異性愛を演じること」「男性同士の友情や恋愛」を媒介として作りだされる女性たちの親密圏のあり方を社会的にあきらかにしたものである。

こうした媒介を通じて、ファンたちは規範化された異性愛とは異なる読み方のコードを共有し、独特のホモソーシャル（同性同士の社会性）を生み出していく。男性が介在する異性愛を括弧に入れることによって他なる性愛・友情の可能性を模索しているのだ。

鍵となるのは、男性、キャラクター同士との親密な関係そのものに焦点を当て、オリジナルでの関係を読み替えていく相関図消費という読み方である。ファンたちは、たんに特定の登場人物に「萌え」ているのではない。そうではない、人物間の関係性を異性愛中心主義の世界とは異なる形で読み替えつつ、その読み替える作法をファン同士で紡ぎだしている。

ここには、個別の人物へと向けられる男性的な性愛とは異なる、性愛と友情のコードが刻み込まれている。異性愛にとっぴりつかった人たち、とくに自分の欲望を一般化しがちな男性たちにせび読んで

もらいたい本である。

学術書ということもあって初めの方は少々読むのに苦労するかもしれない。しかし、そこで明晰にされる概念の強度なしでは3章以降を読むことはできない。久々に現れた骨のある文化社会学の書である。

(新曜社、3672円)



著者は1978年生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科招へい研究員。文化社会学・ジェンダー論。共著に「宝塚という装置」など。

